

【ポスター発表】

**実習生の学修過程の一貫性に着目したコンピテンシー・モデルの検討
—相談援助実習と相談援助演習との連動を踏まえて—**

○関西福祉科学大学 種村 理太郎 (7198)

橋本 有理子 (関西福祉科学大学・4381)、小口 将典 (関西福祉科学大学・5253)

柿木 志津江 (関西福祉科学大学・4238)、清原 舞 (関西福祉科学大学・5924)

中島 裕 (関西福祉科学大学・2117)、得津 慎子 (関西福祉科学大学・2035)

キーワード：コンピテンシー・モデル、実習生としての専門性、実習教育の可視化

1. 研究目的

社会福祉士などの専門職養成において、実習は中核科目であり、相談援助実習をより効果的・効率的に行うことが求められている。しかし、我が国の実習期間（時間）は、約4週間（180時間）と極めて短く、多様な特性をもつ実習生が増えているなかで、社会福祉士として多様なニーズに対応できる高度な実践力を福祉現場からは強く要請されている。

こうした背景を踏まえ、本研究では社会福祉士及び精神保健福祉士養成課程における相談援助実習（事前・事後指導を含む）と相談援助演習との連携のもと、実習生と実習指導者、養成校教員との三者協働による効果的な実習教育のシステム構築を試みることにした。具体的には、各実習段階における実習生の自己評価と実習指導者による当該実習生の相談援助実習評価を踏まえ、相談援助実習と相談援助演習内容の整合性及び実習生のコンピテンシーシートの検証とその効果的な活用方法の開発を目的としている。

ここでは、実習教育プロセスにおける学生の変化を可視化するために、先行研究から現状と課題を整理してソーシャルワークの学びのプロセスを検討し、効果測定の指標としてのコンピテンシーシート項目を作成した。

2. 研究の視点および方法

まずは、文献研究によって養成教育におけるコンピテンシー領域と項目について整理し、実習教育の現状と課題を検討した。さらに本学が提案した相談援助実習モデル（関西福祉科学大学社会福祉実習教育モデル研究会編,2014）に対応するコンピテンシー・モデル図を作成した。

3. 倫理的配慮

本研究で実施される文献研究の取り扱いについては、日本社会福祉学会倫理規定を厳守する。なお、関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得ている（14-40）。

4. 研究結果

養成教育およびコンピテンシーに関する先行研究20点のレビューを行った。一般的にコンピテンシーは、領域・項目によって構成されている。その内容を踏まえ、研究会において実習教育でのコンピテンシーの現状と課題の検討を行った。その結果、主に以下の4点の課題が挙げられた。

- 1) 実習生を中心にした関係者間によるコンピテンシーの評価方法

コンピテンシーの活用には、「360度フィードバック」と呼ばれる関係者を含めた評価が求められるが（Lucia, Lepsinger 1999＝2002 遠藤訳）、日本社会福祉士養成校協会（2009）では、実習教育に携わる関係者間で共有することで、指導に活用できると述べている。

2) コンピテンシー導入による相談援助実習への相談援助演習の教育成果の反映

相談援助実習は、これまでの講義や相談援助演習で身につけたものを現場実践で実際に応用していくものであると指摘されているように（植戸, 2011）、実習と演習や講義との関係は深いことは明らかである。そのなかで、実習と演習を連動させる評価項目の検討が試みられている（藤田ら, 2008）。

3) 養成校で到達する専門職像と現場が求めている専門職像との間の開き（ズレ）

養成校における実習生の教育的到達目標は、実習生としての専門性の獲得である。実習先が求める実習生としての専門職像との評価に開き（ズレ）がある場合もある。その中間点として、就学時の実習生としての専門性の到達点を設定することで両方の開き（ズレ）の調整ができるのではないかと考えられる。

4) 実習生の学修過程におけるコンピテンシー領域間の関連性

ルシアら（＝2002）は、適性・性格、スキル・知識を結合した基盤によって行動が構築されるコンピテンシー・モデルを提案している。藤田ら（2008）も、コンピテンシー領域を関連づけてコンピテンシー評価のための概念を整理している。日本社会福祉士養成校協会（2009）では、コンピテンシーの領域と評価項目は紹介されているが、それぞれの領域がどのような関連性を持っているのかについては触れられていない。

以上の研究成果をふまえ、本研究では、「基本的学習能力」「社会的能力」「価値」「知識」「技能」「実践的能力」の6カテゴリーに整理したコンピテンシー・モデル図を作成した。そして、学生に求められているコンピテンシーについてより理解しやすいような77項目のコンピテンシーシートを作成し、その内容を検証するために学生を対象としたアンケート調査を実施した。

5. 考察

先行研究の検討から、実習指導過程における学修段階を設定し、その到達度を評価することが求められていると考えられた。評価の具体的な方法として、実習生・実習指導者・養成校教員の三者協働の視点を導入した多角的な評価のプロセスを経ることによって、その内容を積極的に教育内容に反映しうるのではないかと考えた。そのためにも本人の能力や学習した知識・技術・価値の積み上げによって、ソーシャルワークの実践能力が習得できる過程を整理することが必要であり、可視化された本コンピテンシー・モデル図と、それに基づく経年的調査が、教育現場と実践現場で繰り返されることには意義があると考えられる。

主な引用・参考文献

- ・藤田久美他「社会福祉教育におけるコンピテンシー評価項目の検討」山口県立大学社会福祉学部紀要 14、65－78、2008